たのしい学び。本当の学び。大人も子どもも！— クラス便りとエッセイ

山びこ通信

DISCE LIBENS!

学校法人 北白川学園
山の学校 15周年
LVDVS COLLINVS

2017
Apr.-Jul.
春
学期号

クラス一覧 ページ
ことば 7　かず 8~10　しぜん 21~23　かいが 6　つくる 4,5　歴史 12　将棋 3
西洋の児童文学を読む 2　西洋古典を読む 19　数学が生まれる物語を読む 11
数学 10,12　英語 14　漢文 3　東洋古典を読む　ユークリッド幾何
ギリシャ語 17,18　ラテン語 17,18　イタリア語 15　ロシア語 17　フランス語 16　ドイツ語 15
山の学校ゼミ『社会13 / 数学 / 調査研究7 / 法律 / 生活と文化 / 倫理7』　ウェブプログラミング

そうだ、ラテン語やろう！
——今なぜラテン語なのか

山の学校代表　**山下 太郎**

私はこのたび縁あってラテン語の作品（キケローの「スキーピオーの夢」）の注釈書を書きました[1]。専門書ではなく、初学者向けの独習書です。「ラテン語講習会」[2] の教材を元にしたもので、初級文法を終えた人を念頭に置いた丁寧な解説を心がけています。原文の一字一句すべての単語に文法的説明を施し、文脈に即した訳語と逐語訳を添えました。以下、この本を書いたねらいと、なぜ今ラテン語か？ということについて、思うところを述べます。

「ラテン語」と聞くと、「難しい」というイメージをもつ人が多いようです。英語が苦手な人にとって、英米人が「苦手」と告白するラテン語は、きっと英語の何倍も難しいのだろうと想像するのは自然なことです。しかし、それぞれの言語をまったくのゼロからスタートした場合、ラテン語の発音は基本的にローマ字読みでよいので、英語よりもとっつきやすいのは事実です。

一方、英語に比べて文法が複雑で覚えるのが大変、というお声もちょうだいします。たしかに暗記すべき項目は圧倒的に多くありますが、文法そのものは想像以上に規則的です。問題はこの文法との付き合い方です。実際に大学の授業でラテン語を受講したものの、途中で挫折した人は少なくないと思います。挫折しやすいタイプの人は生真面目な人が多いという印象です。週一回の授業ですと、毎回暗記しないといけない事柄がたくさん出てきます。先生によっては、前回の範囲について確認テストをされる場合もあり、その対策に気分が滅入ることもあるでしょう。

私が「ラテン語講習会」でお伝えしているアドバイスは、「暗記しない」、「覚えない」というものです。その代わり「調べる」ことはしましょう、と。変化表を暗記することはラテン語学習の王道であり、そのメリットを否定するものではありません。ラテン語は語尾が激しく変化しますが、変化表が頭に入っていると瞬時にその形が何かがわかります。一方、それを覚えていない場合、いちいち教科書の該当箇所を調べる必要があるので、時間が余分にかかります。ラテン語の速読速解を目指すなら暗記は不可欠で 〈▶巻末へつづく〉

[1]『ラテン語を読む　キケロー「スキーピオーの夢」』、ベレ出版、2017。
[2] 山の学校の出張授業として、東京、名古屋、京都で定期的に開催（各々月一度）。初級文法のクラスのほか、キケローの『スキーピオーの夢』、『アルキアース弁護』、『カティリーナ弾劾』、ウェルギリウスの『アエネーイス』を読む講読クラスがある。

新クラス

『西洋の児童文学を読む』　担当　福西 亮馬

> ティウリは目を開けた。礼拝堂ははるか遠く、祭壇の前で祈りの夜を過ごしていたのは遠い昔のことのように思われた。――『王への手紙（上・下）』（トンケ・ドラフト、西村由美訳、岩波少年文庫）1.6

先週読んだこのシーンが、今この稿を書いている私の心境です。春学期からスタートしましたが、「ここはどこだろう？ いつの間にこんなところへやって来たのだろう……」という気がします。というのも、生徒たちが自発的にクラスを運営してくれており、むしろ私がそこへふらりと足を踏み入れた心地を覚えるからです。

本の好きな生徒たちが三人集まってくれています。本当に本が大好きな生徒たちです。面白いテキストと、読書家の生徒たち。それがこのクラスのすべてです。

西洋の児童書のトップバッターは、『王への手紙（上・下）』（トンケ・ドラフト、西村由美訳、岩波少年文庫）です。だいたい 6 ページずつのペースで丹念に読んでいます。この稿を書いている時点で、第 1 章『指令』の 6 まで進みました。もうすぐ第 2 章『森をぬけて』が始まります。内容の面白さは折り紙付きです。クラスでも生徒たちが興奮した面持ちで異口同音に「面白い！」と話し、「もうここまで読んだ！」と報告し合っています。作品の面白さを、私も改めて「そうなんだ」と確認できました。それまで私一人で感じていたことが、より普遍的であることに勇気づけられました。

> 「ここに手紙がある。ひじょうに重要な手紙だ。王国全体の安寧がこの手紙にかかっている。ウナーヴェン国王への手紙だ。」――上掲 1.2

騎士見習いティウリは、騎士叙任式の前夜に見知らぬ老人から手紙を託されます。そして「自分がぐんと歳をとり、考え深くなったような気がした」（1.6）とあるように、一人の騎士の死を看取ったことが、彼にいよいよその手紙の持つ任務の重さを自覚させます。物語の中で、ティウリはこれまで何度も振り返り、手紙が胸にあることを確かめ、そして再び胸にしまいます。そして自分の足で、考えて動き出します。ティウリの葛藤は、物語の舞台となる国全体の大きさからすれば、とても小さく映るかもしれません。けれども自分で自分を励まし、行動する彼の姿は、まぎれもなく一つの勇姿です。生徒たちも、ティウリが困難に足を踏み入れるたびに、居ても立っても居られなくなる様子です。すでにこの一つの物語は「彼らの物語」となっています。

授業では、まず音読をしたあと、生徒たちにそれぞれの発見を報告してもらいます。調べた語彙、共感した個所、大事だと思った箇所、なぜそうだと思ったのかの理由など。また似た表現（作品を構造的に理解する手がかり）にはページの相互参照をつけることもしています。予習では、読書ノートを作っています。語彙の辞書引き、テキストからの引用、感想などで 1 週ずつ新しい内容を埋めていきます。

最近では、発表当番も作りました。当番はその回に特に責任を持ち、より詳しく調べてきます。要約を作り、語彙や内容に関する資料を揃えてきたりして、それをクラスで配布します。その発表の際には講師がフォローします。また当番でない人たちも、自分が次に同じことをする立場であることを念頭に、これまで通り活発に意見を出し合います。

生徒たちは全員五年生ですが、自分の人生についてそろそろ考え始めているのだと思います。その彼らにとって、ティウリは「もしもの姿」を映し出す第二の自己、よき心の友となっていくことでしょう。また生徒同士の間にもそのような関係が見られます。自分の意見をしっかりと持ち、「だからこそ」互いの意見を尊重できる生徒たちの精神的な姿に、私は目を瞠ります。そしてしばしば垣間見る彼らの友情に心をほだされます。とても居心地のよいクラスです。

『王への手紙』の上巻は、ティウリがダホナウト王国から大山脈を越えるまで、そして下巻はいよいよウナーヴェン王国へ渡ります。上巻が終わるのはまだまだ先のことですが、大山脈でピアックというティウリの友になる人物が登場します。そのことを生徒たちは読んで（あるいは読み終えて）すでに知っています。クラスがピアックの登場を心待ちにしています。そのように思ったこともまた、いつか「遠い昔」のように感じる日が来るのでしょうか。そうなると良いなと私は思います。

新任講師のご紹介

2017 年 4 月着任の先生です。▶P. 3 , 4 をどうぞ御覧下さい。

・『漢文入門』クラス担当
福谷 彬（ふくたに あきら）
京都大学文学部 非常勤講師

・『つくる1～2年』クラス担当
山中 壱朗（やまなか かずあき）
京都大学大学院 人間・環境学研究科 相関環境学専攻

『漢文入門』　担当　福谷 彬

今春から開講している漢文入門のクラスでは、講義時間の前半を小川環樹・西田太一郎『漢文入門』（岩波書店、1957 年）を用いて漢文の基本的な語法を学び、後半を朱熹『近思録』を用いて朱子学の概説を行っております。

『漢文入門』が挙げている用例は、各文法事項を知る上で有益なのはもとより、『韓非子』や『孟子』のように思想的にも重要なものが多いです。講義では、文法的な説明に加えて、思想内容についても解説することに力を入れています。クラスでは受講者の方に例文を訓読していただき、私から解説した後、質問にお答えするという形式をとっています。

また、『近思録』は朱子学の創始者、朱熹が作った学問の入門書ですが、先人の書の引用集であるため、編集者の朱熹の意図はなかなか読み取りにくいものになっています。本講義では、引用元の思想家の思想や、その言葉が踏まえる経書の文脈に気をつけつつ、朱熹がいかに先人の書物の思想を吸収しつつ、自己の思想を形成しているか、という点をご紹介できれば、と思っております。

新クラス

王将『将棋教室』　担当　中谷 勇哉

クラス制になり、現在参加者 6 名で活動しています。人数が減ったことで、以前より全体に目を配れるようになり、将棋に集中しやすい環境にできればと思っています。

道場冒頭で行っている講座では、「攻め」編と「受け」編を隔週交互に行っています。両者に共通するポイントは、「複数の駒で連携する」ということです。受けの場面では、「守りは金銀三枚」という格言があるように、王様の周りに金銀合計三枚（以上）を配置することが推奨されます。ここで重要なのが、駒同士がお互いに連携していることであり、「どの駒が取られても他の駒がそれを取り返せるという」状態を作ることで、この状態の典型例が「矢倉囲い」や「美濃囲い」などに代表される「囲い」です。ですから、囲いを学ぶことは、守り方全般の基礎を学ぶことに直結します。攻めの場面では、「攻めは飛車角銀桂」という格言もあるように、守りに使用していない銀や桂馬を、飛車や角の援護を受けながら活躍させていくことで敵の守りを突破することを目指します。

4 月の段階では王様を囲わず、飛車と角だけで突破しようとして負けていた子も、徐々に他の駒をうまく使うようになり、成長を感じさせる場面も増えてきました。このままのペースでいきたいと思います。

さて、話は変わりますが、藤井聡太四段の活躍（この原稿を執筆している時点で公式戦 20 勝無敗）が注目を集めています。藤井四段については今回の報道でお知りになった方が多いと思いますが、実は彼は小学 6 年生のときに詰将棋の解答能力を競う「詰将棋解答選手権」で優勝しており、将棋ファンの間ではプロになる以前から有名でした。この大会はアマチュアだけでなく、詰将棋に自信のあるプロ棋士も多数参加しており、小学生での優勝（しかも全問正解）はとてつもない快挙だったのです。将棋のルールをご存知の方は是非そのときの問題と解答をご覧になってみてください。きっと驚かれると思います。

藤井四段がこれほど上達した理由の一つは「趣味が詰将棋」と答えるほど主体的に将棋に熱中していることだと思います。このクラスを通じて、将棋に熱中する「きっかけ」を与えられたら幸いです。

『つくる』1～2年　　担当　山中壱朗

春学期から担当しております山中壱朗（やまなかかずあき）と申します。1回目が始まる前は「これを作ろう」というアイデアをいくつか準備をしていたのですが、「〇〇を作りたい」と自ら持ってきた材料を広げて取り組む様子に触れて、1回目の冒頭から衝撃を受けました。

現在は「作りたいものを形にできる場」とすることを念頭において見守っております。誰かが作り方をまとめたものを見て最短のルートを辿る経験も大事ですが、『つくる』では、「これを作りたい」とイメージしていることを、（目に見えない設計図をもとに）種々の材料を用いて時間をかけてでも形にする経験を重視することにしました。

実際に形にする段階では、もっと大きくしたほうがよいのか、色や材質を変えたほうがよいかなど、考えなければならないことはたくさんあります。それらの課題に対する方策をすぐに見つけるのは大変ですが、粘り強く取り組む中で初めて見えてくる視点、思いもよらぬ発見もあります。

ボタンやスチレン球、薄いステンレス板など、「これを作ろう」と示す準備をしていたものも、私が想定していなかった形で取り入れてくれる場面もあり、毎回新たな発見をしております。同じものを見ていても、その対象について考えていることは人それぞれであることを実感しました。

時間やスペースは限られていますが、互いに異なるものを作り、完成したものだけでなくそれぞれの作る過程も見ることができます。形には現れなくとも、アイデアの引き出しを多くする、イメージをより豊かなものにする機会になればと期待しております。

『つくる』3年　　担当　藤田 温士

つくる3年のクラスには新しい男の子が増え、女の子二人、男の子二人のより元気なクラスになりました。

厚紙によるブーメラン作りに挑戦した時は、四人それぞれ大きさも違えば形も違う個性的なブーメランを作って校庭で遊んでいました。しかしなかなかうまくいかないもので、お互いに影響を受けながら何度も作り直し、各々の形を確立させていました。その常識にとらわれない物作りは大きな可能性を感じさせてくれました。

森に落ちている材料を探しに行った時は多様な植物に目を奪われ、時を忘れて探検してしまうなど、好奇心旺盛な様を見せてくれました。

常に話し声が絶えないような元気なクラスで、これからどのようなものが飛び出してくるのか、とても楽しみにしています。

『つくる』4～6年　担当　福西 亮馬

春学期の前半は、プラスチックや空き箱を組み合わせた「がらくた工作」、ゴム動力バットの「野球盤」、そして「大型ビー玉スライダー」を作りました。ビー玉を使ったからくりとの相性がわりと見られます。

学年が上がるにつれて、「こんなものが作りたい！」という夢はだんだん複雑多岐になります。また完成予想と完成結果とのズレに対する自意識もより一層シビアになります。自身の完成予想の複雑さと 80 分という枠内で作れるかという現実性、そして 1 回ずつの達成感との兼ね合いは、毎回を通して私の課題です。

そこでいったんリセットして思うのは、やはり複雑さに憧れる今だからこそ、その基礎である単純さに目を向ける必要性です。単純が「良い複雑」を生むのであって、最初からある複雑はどうしても「悪い複雑」を生みます。ブロック遊びがその例ですが、より研究されたシンプルさが、より高い応用力を持っています。なじみの深い素材ほど各自の応用できる余白は広がります。そこでクラスでは、複雑な道具立てを準備するよりも、ますます「単純な物で何ができるか」に的を絞っていくことを心がけたいと思います。そして技を教えるよりもコンセプトが生まれることを大事にしたいと思います。

今号の『つくる 1 ～ 2 年』クラスの記事で、山中先生が「作りたいものを形にできる場」と書いておられますが、私もそれが「つくる」の原点だと思います。そこにまた立ち返って、次学期も挑戦したいと思います。

『かいが』A・B　　担当　梁川 健哲

気候のよい時は積極的に外へ出て描くことが多いです。そんなとき、クラスの前半は、何か素敵なものはないかと足元の草花や虫を観察したり、遠くの木立や空を眺めたり、一見して「しぜん」クラスのような時間が流れます。

何かを描こうという目的を持つと不思議なもので、いつもの「見る」という行為は「ものすごい『見る』」に変化します。そして、どんなに見慣れたと思っているものでも、「何度でも初めて見る」ことができます。私はそのようにして何かに向き合っている時間を何よりも大切にし、第一にこのことを実感してもらいたいと考えています。

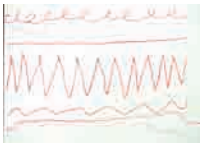
また、私たちは「目を閉じて見る」ことも可能です。たとえば「感情の色や形」。みんなと対話を重ねていると、必ず見えなかったものが眼前に現れてきて、自分自身やお友達の心のカタチと向き合うことになります。それらもまた「初めて見る」世界です。

具象であれ、抽象であれ（または写実であれ、空想であれ）描くことは誰にとっても、捉えようとしては逃げていく色や形を何とか留めようとした努力の軌跡なのですから、まずはそれらを讃え合う気持ちをみんなが持てるような空気作りに努め、それぞれが「初めて見た世界」を喜び合いたいです。また、可能な限りそうした対話の中から「いかに描くか」という考え方についてのヒントを汲み上げ示唆することにより、それぞれにとっての「旬な学び」が生まれるよう導いていきたいです。

終わりのない、発見と探求。描くことを楽しみたいみなさんのご参加をお待ち致しております。

● 屋外にて

「この桜、花びらがいっぱいある！」見慣れたはずの園庭には、「初めての」発見ばかりでした。



●「見えないもの」を描く

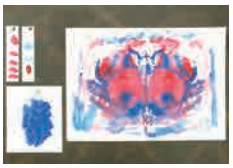
「元気な線／元気のない線」かけるかな。「楽しい線」ってどんなだろう？そんな「準備運動」を経て「見えないもの」を具現化する感覚をつかみ、みんなで様々な「気持ち」や「様子」を描き、当てっこをするように、互いの絵を見て感じることを伝え合いました。

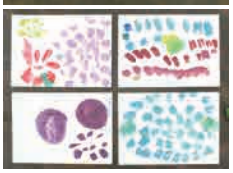
●「描く」ということ

「りんごを描いて下さい」という問いを、続けて２度投げかけました。
１度目はその言葉を自由に解釈して。
２度目は目の前のりんごを観察して。

● 色探し

パレットの練習も兼ねて、三原色の混色から色を生み出す実験をしたり、目の前の花の色をパレットの上で探したりしました。





『ことば』1～2年
山の学校ゼミ『調査研究』『倫理』　担当　浅野 直樹

自然に出てくる言葉を拾ってふくらませています。

小学１～２年生と私とでは年齢が大きく違いますし、出身地や趣味も異なるので、言っていることがわからないということが多々あります。三色ゼリーと言われても何のことかわからず説明を受けてようやく給食の人気メニューだということがわかりましたし、タイファイターという言葉にも聞き覚えがなかったので聞き返したら絵を描きながらスターウォーズに出てくる宇宙船だと教えてもらいました。長期休暇明けなどに作文を書いてもらう際には、わからないことをお互いに聞くようにしています。

調査研究クラスはもとより、倫理クラスでも、受講生の発言を受けて、それならこの本はどうだろうかと勧めています。調査研究クラスと倫理クラスは同じ受講生ということもあって、両クラスの内容が連動するようにもなってきました。主に調査研究クラスでは自分の主張したいことから考えて、倫理クラスではそれと関係する哲学者や思想家たちの著作を読むという分担です。その具体的な内容はここにとても書き切れないので、興味があって時間が許せば８月に予定している発表会にどうぞお越しください。

『ことば』3～4年 /4～5年　担当　福西 亮馬

今学期は俳句を中心に取り組んでいます。これまで通り、芭蕉や一茶などの句を紹介するとともに、『こども歳時記』（長谷川櫂／監修、季語と歳時記の会／編、小学館）を読んで、春と夏の季語を学んでいます。そのあと教室の外に出かけて、極力季節を目で確かめながら俳句を作っています。春はふらここ(ブランコ)、モクレン、桜、山吹、たけのこ、たんぽぽ、春雨。夏は若葉、こいのぼり、ひきがえる、蟻、青梅、びわの花、燕の子、五月雨などが詠まれました。

季語とはイメージの凝縮された単語です。それなので、使わなければいけないというよりは、使うことで字数上の大きな得をします。また俳句は詩なので、様々に言いたいことをあえて言わずに圧縮した「や」や「かな」などの切れ字を使うと、効果的に余韻を残せます。そこで最初のステップとして以下のような簡易な方法を教えました。

１）季語を一つ、切れ字も一つ入れると、より俳句らしくなる。
２）二つ以上季語や切れ字を入れると野暮になる。（避ける）
３）季語が４文字の場合は、上五に「〇〇〇〇や」で試す。
４）季語が３文字の場合は、下五に「〇〇〇かな」で試す。
５）季語と物の名前とは極力離して置く。
６）季語には説明不要。季語のために作文しない。

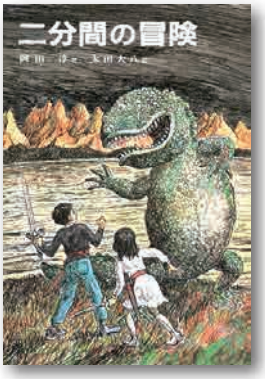
１）～４）は中学年、５）と６）は高学年向きのアドバイスです。もしこれまで「たんぽぽは」としてきたところを「たんぽぽや」とし、「さくらだね」を「さくらかな」とするだけでも十分効果があります。ぜひ試してみてください。次に生徒が意識的に「や」を使った例を挙げます。

アメンボやすいすいおよぐ平およぎ　Uta（3 年）
アメンボのすいすいおよぐ平およぎ

初句（原句）の方が良く、二句目はわざとそれを惜しくした例です。一字違いですが、大きく異な

る点があります。それは響き方です。試しにそれぞれを一回音読したあと、二回目は上五(「アメンボや」の部分) だけを声に出し、あとの部分を黙読してみてください。するとどうでしょうか。頭の中で「や」の音は終わりまで重なってこなかったでしょうか？ もし分からなかったら、今度は鐘を打った後のように「やー……」と口ずさみながら字面を追いかけてみてください。特に句のイメージを邪魔しなかったと思います。しかし「の」の方はぶつぶつと句のイメージを切るか、「の」が消えてしまうかのどちらかだったと思います。というのも、「アメンボの平およぎ」と分かってしまった二回目以降の詠みでは「の」の音はほとんど用済みだからです。そして詠みの繰り返しにまだ耐えられる方が、飽きのこない歌という判定になります。また「アメンボ」は夏の季語ですが、初句では、「や」は句全体に響いており、「アメンボ」が季語のまま何の制限も受けずに運ばれていって、「平およぎ」とコツンとぶつかっています。二つの名詞のぶつかり方の意外さがこの句の面白さであるとすると、切れ字の「や」はあたかも「アメンボ」と「平およぎ」とを乗せる「水面」の役目を果たして効果的です。一方、「アメンボの」とするとせっかくの季語が「平およぎ」を限定する修飾語になり下ってしまいます。以上が二句目の惜しくなる点です。

このようなことはしかし、言葉ではなかなか説明しづらいものがあります。それで俳句を作る前には「古池や」「閑さや」などの古人の俳句をお手本として紹介しているとも言えます。俳句作りにおける気分と型はどちらも大切です。特に 4 年生はその両方に自覚的になってきて、俳句の数は減りますが、1 年生、2 年生、3 年生の時よりもレベルアップしていると感じます。もし切れ字を意識できるようになればさらに高みを目指せるでしょう。



俳句以外の取り組みでは、3 ～ 4 年クラスは「のみのピコ」や「推理クイズ」をしました。4 ～ 5 年クラスは、『おおかみ王ロボ』（シートン、白木茂訳、全国学校図書館協議会）を読み終えました。次は『二分間の冒険』（岡田淳、偕成社）を読みます。どちらのクラスの取り組みも今後が楽しみです。どのような共感が生まれるか、山の学校のブログや秋学期の山びこ通信でまたお伝えします。

『かず』3～4年 /4～5年　　担当　福西 亮馬

これは私が NHK のとある番組で感銘を受けたことです。将棋の森内俊之十八世名人資格者が、**「考えることが苦でないこと」**を棋士になる若い人たちへのメッセージとしていました。私は番組の内容から次のように受け取りました。「将棋は勝負の世界であるけれども、一方ではそれ自体の奥の深さを喜びとしなければ長く居続けられない世界でもある」と。

その時、知人との会話がふと蘇りました。彼は流体力学・計測工学の研究者なのですが、学生の面倒を見ることで嘆いていました。「大学に来て『普遍性』に興味を持たないことはありえるか？ たとえば問題にしている事柄を『数式』で表せたらほっとできるだろうに」と。学生が行き当たりばったりから抜け出すことに興味を覚えないのはなぜだろうかと。私もそれに同意の苦笑を洩らしたのでした。

『生きること考えること』（田中美知太郎、彌生書房）の中で、哲学者である著者はこう書いています。「考えることからの解放ではなくて、考えることそのことが解放され、自由になるところに、考えることのよろこびがある」と。おそらく知人の目にあまったその学生は、「問題から早く解放される」ために頭を使おうとしていたのでしょう。

ところで算数では、答が合っていても数式が間違っていると減点されるという話をよく聞きます。これは理不尽でも何でもなく先々に対する配慮です。およそ普遍性のために考えるのでなければ数学をしているとは言えないからです。「これはどんな時にでも成り立つのだろうか？ もしそうでなければどういう時に成り立つのだろうか？」という興味があってこそ、大学で、またその先で、ひいては

行く先々のどこででもますます花咲くのでしょう。よく「実社会では四則演算さえできればよい」という意見がたまに理系の人の口から飛び出すことがありますが、それはあたかも、古典的名作を読んで育ったはずの図書館司書が、その作品を棚からおろして流行の漫画を並べ直すような、足元を忘れた恩知らずな配慮だと言えるでしょう。

前置きが長くなりましたが、クラスでは、考えることの楽しさをパズルで、1問にかけるねばり強さを間違い探しや迷路で、また積み残しのチェックをプリント学習でしています。最近は、3～4年クラスではかけ算とマッチ棒パズルを、4～5年クラスではわり算と論理パズルを中心に扱っています。

マッチ棒パズルはひらめきの要素が強いように思われます。けれどもこのひらめき自体を分解してみると、可能性を「よく検討する」ことに還元できます。1つの問題に使われるマッチはだいたい20本程度です。そのうち動かす候補のマッチは5～10本程度、またその移動先の候補も5～10か所程度です。とすると多くて10×10＝100通りについて考えることになります。たくさんの選択肢を見落としなく調べ上げることについてはコンピューターが得意です。一方、最初からありえないパターンをうまく捨てることについては人間が得意です。このちょうど真ん中を行くのが、ひらめきです。そのような「真ん中」がなぜ難しいのかというと、誰にでも思考のくせというものがあって、うまくいかないと分かっていながらつい同じパターンを何度もたどってしまうからです。そしてよく検討する前に焦れてしまうからです。そこで、「なぜうまくいかないのだろう」から「どうやったらうまくいくのだろう」への転回が必要です。そこで自分自身を健全に疑ってみます。しかしそれにはある程度の元手がいります。将棋だと、この元手とは持ち駒、特に歩を有効に使った時の勝ちぐせにたとえられます。「一歩持ったら、歩の切れている筋を検討する」ことです。たとえば、相手の金の頭に打ち込んでみたり（ダンスの歩）、二段目に控えている相手の飛車の真横に打ち込んでみたり（手裏剣の歩）。そういった検討なしに、煮詰まった局面になると、つい大駒を動かしてしまうとしたら、それが一つの「思考のくせ」です。もしそれで勝てたとしても過去の成功体験にしがみつくことでしかないでしょう。そうではなしに、普遍的なプロセスに自信を持てるようになる取り組みとして、パズルを解くことを奨めています。

論理パズルでは、証明の文章を生徒たちに書いてもらっています。「もし～ならば」「だから～なので」「矛盾する（しない）」という筋道には、それを書いた者が大人であろうと子供であろうと関係ありません。論理が相手にするのは常に普遍性だからです。

問題
アリスとうさぎがじゃんけんを1回して、どちらかがパーで勝ちました。
アリス「私はパーを出したわ」　うさぎ「ぼくはグーかパーを出したよ」
勝った方は正しいことを言い、負けた方はうそをつきます。アリスとうさぎ、どちらが勝ったでしょう？

Ｓちゃん（4年生）の解答
もしも、アリスがかったなら、ぜったい「パー」を出している。でもうさぎが負けたら、うさぎはうそをつくから、　「パーかグー」のうそはチョキだから、うさぎが勝つ。矛盾。アリスはかてない。
もしも、うさぎがかったら、うさぎはパーを出さなければいけない。だからアリスはグーを出すでもうそをつかないといけないから「パーを出す」はうそでＯＫになる。
Ａ．うさぎ

このような解答を一生懸命に書き残してくれています。考えること、またそれに伴う作業が苦でなければ、いずれ答への筋道が見つかります。もちろん実社会や数学の世界でそんなにうまく行くことはしょっちゅうありませんが、少なくとも小学生の間は、算数やパズルでは解の存在が保証されています。そして最初に見えていなかったものが見えた時、その瞬間は視野の広がりとして経験されます。山の学校で大事に見聞きしておきたいのは、その瞬間の目の輝き方であり、声の弾み方です。それが普遍的な自信としてこれまでの蓄積に付け加えられ、反対に特殊な思い込みの数を減らしてくれるこ

とでしょう。

考えることは面倒くさいことです。その「だから」という分かれ道には、このような標識が立っているでしょう。「A:もうそれをしなくてもいいために」、「B:より思い込みから解放されるために」と。その**分かれ道に立つ生徒たち**をクラスでは応援しています。

『かず』1～2年　『中学・高校数学』A・B　『高校数学』

担当 浅野 直樹

これらすべてのクラスでの取り組みに共通するような問題を見つけました。

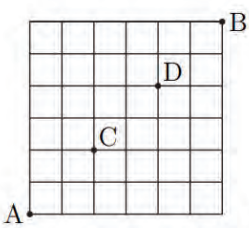


図1

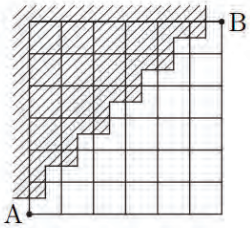


図2

図1と図2は碁盤の目状の道路とし，すべて等間隔であるとする．以下の問いに答えよ．

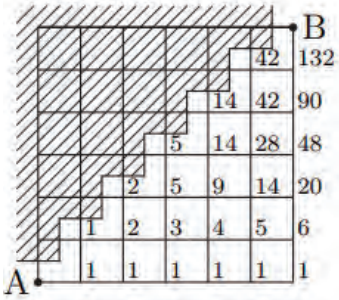
(1) 略

(2) 略

(3) 図2において，点Aから点Bに行く最短経路は全部で何通りあるか求めよ．ただし斜線の部分は通れないものとする．

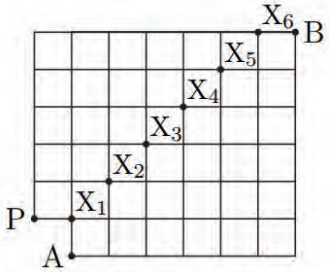
（九州大）

小学1年生でも問われていることの意味はわかるでしょう。何日かかけて地道に数えれば正しい答えにたどり着けるとも想像できます。少し工夫をするとしたら、下図のように各点まで進む最短経路の総数を書き込むことによって比較的簡単に数え上げることができます。



ある点まで進む最短経路の総数は、その点の1つ左の点まで進む最短経路の総数と1つ下の点まで進む最短経路の総数を足せば求めることができるというのがポイントです。最短経路なので左から右に進むか下から上に進むかのどちらかしかあり得ないからです。こうした考え方は、かず1～2年クラスで取り組んでいる迷路やパズルでしばしば現れます。

高校生（あるいは進度の早い中学生）なら計算で求めたくなることでしょう。点Aから点Bに行く最短経路は ${}_{12}C_6 = 924$ 通りと求められるということは定番です。そして斜線の部分を通る最短経路は下図の X_1 ～ X_6 のうち少なくとも1点を通ります。



点Aから X_1 ～ X_6 のうち少なくとも1点を通る総数は、Pから X_1 ～ X_6 のうち少なくとも1点を通る総数に等しいので、その総数はPからBへの最短経路の総数であり、${}_{12}C_5 = 792$ 通りです。以上より、求める総数は $924 - 792 = 132$ 通りとなります。

実はここで求めたのはカタラン数と呼ばれるものです。参加人数が決まっている場合にトーナメント表の作り方が何通りあるかもカタラン数になります。例えば4人で考えてみましょう。平等な形のトーナメントを ((ab)(cd))、aさんとbさんが最も不利でdさんが最も有利な形を (((ab)c)d) のように表すことができます。右カッコの場所さえ決めれば左カッコは自動的に決まるのでそれを無視すると ab)cd))、ab)c)d) のようになります。求めたい総数は、まずaを左端に配置し、残りのbcdの文字と3つの右カッコをすでに並べた右カッコの個数が文字の個数を超えないように並べる総数なので、3×3マスの最短経路で対角線より上の部分を通らない総数と等しくなります。

このような問題を各学年の生徒と共に考えるのは楽しいです。

（問題文と図は http://kumamoto.s12.xrea.com/nyusi/Qdai_tech_2008_kouki.pdf から引用させていただきました）

新クラス

『数学が生まれる物語を読む』

担当　福西 亮馬

『数学が生まれる物語 数の誕生』（志賀浩二、岩波書店）を読んでいます。この稿を書いている時点で p32 まで進みました。「1，2，3，…」と指折り数える動作が自然数と対応すること、また「…」という素朴な表現の中にすでに「無限＋1＝無限」という捉えがたい概念が潜んでいることを垣間見ました。

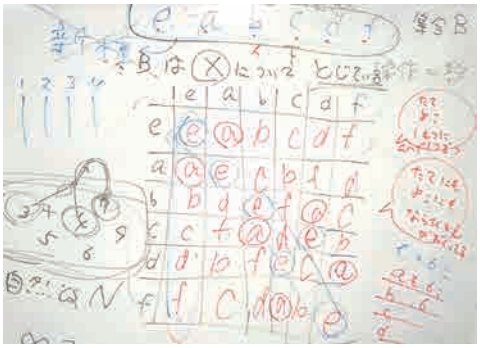
筆者は、私たちの精神の中には無限、すなわち「どこまでいっても終わりがなく数えきれない様子」を認識するための、いわば「一筋の明るさ」が内包されていると注意を喚起します。そして「数学的な考えが，私たちひとりひとりの中に誕生してきたのは，このような光の中からである」（上掲 p2）と述べ、数学の旅、すなわち帰納と抽象化の歴史へと読者を誘います。

> ‘指折り数える’という行為に関しては，数はどこからはじめても均質な様相を呈している．この均質さを崩さない限り，数は次から次へ続くというとぎれることのない連鎖によって，１からはじまって，どこまでもどこまでも，無限の彼方へと延び続けていくのである．――上掲 p23

その道中で「ペアノの公理」という抽象的なアイデアに触れました。その新しさは、どの自然数にも共通の性質をいくつかのルール（公理）として抽出したことにありました。無限集合（無限個の数の集まり）である対象を有限の言葉でつかまえる、これは驚くべきことだと思います。

また自然数が足し算とかけ算について閉じていることを見ました。「閉じる」とはどういうことかというと、自然数という世界の中からどんな 2 つの数を持ってきても、その足し算やかけ算の結果もまた同じ自然数の世界の中に見つかるということです。このように、ある演算の結果が、考えている数の世界の外に出て行かないことを、その演算について「閉じる」といいます。

その有限な例として、あみだくじを取り上げました。たとえば 3 本の縦棒を持ったあみだくじは、上側に書かれた「123」を下側で「213」などに（1 対 1 対応で）並び替えます。このようなあみだくじの集合を考えます。それは 6 種類（a ～ f とします）あります。そしてあみだくじを上下につなげることを仮に「かけ算」と呼ぶことにします。そして 6 種類のうちから任意の 2 種類を選んでかけ算し、可能な限り新しいあみだくじを生み出すことを考えます。すると結果はどうなるでしょうか。実は 6×6=36 パターンのすべてが元の 6 種類のどれかに落ち着きます（図 1 参照）。つまりあみだくじでは「上下につなげること」について「閉じている」ことが分かりました。（またこのあみだくじの例を通して、自然数のように ab＝ba という積の交換法則が成り立たない集合が存在することも確認できました）。



（図1）M 君が調べ上げたあみだくじの演算結果

そして、同じことを無限集合である自然数でも考えます。先の引用文には「均質さを崩さない限り」とありましたが、指折り数える（+1 する）ことによって構成された無限集合が、+1 とは基本的に別の演算である足し算やかけ算についても「閉じる」ことは、一見自明でもあり、不思議なことでもあるように思います。

さて、授業の形式は、最初のうちはまだ講義に比重を置きましたが、春学期の途中からは、テキストを読んで発見したことや疑問に思ったことを生徒たちから先に発表してもらい、後で講師がフォローするという形式を取っています。M 君には「あみだくじ」について考察したことを報告してもらい、E さんには「ピタゴラス」「加法と 1+1=2 の証明」「複素数」について発表してもらいました。そのようにホワイトボードの前に出てきて、先生の代わりに誰かに説明することで自分の理解をさらに深めたり、時に学校で得た知識を体系化する場としても、クラスを大いに活用してほしいと思います。

『中学数学』2～3年　　担当　吉川 弘晃

中学数学のカリキュラムは主に数量分野と図形分野の 2 つに分けられます。前者は文字式、方程式、関数、その他の計算を、後者は作図、平面・空間図形の計測や証明などを含みます。そして、中学数学で求められるのは主に、① 条件や問題文を正しく理解する能力、② 筋道を立てながら解答を進める能力、③ ミスなく計算や証明といった作業を行う能力の 3 つだと考えています。冬学期では①（問題を正しく読むことの重要性）を扱いました。今回は③について②と関連させながら見ていきましょう。

現在、中学 2 年も 3 年も数量分野、中でも文字式や方程式の計算を中心に学習しています。X や Y というふうに文字を置くことの意味を理解することは重要ですが、それ以上に忘れてはならないのは、「計算ではできる限り楽をせよ」ということです。

授業では毎回、それぞれの生徒さんに合わせたレベルの問題を解いてもらっていますが、そこで毎回感じるのは、折角、正しい計算をしているのにもかかわらず、肝心な箇所でミスをするために失点しているということです。その原因の 1 つは問題や条件の読み違えで、これについては前回の『山びこ通信』で扱いました。もう 1 つの原因は煩雑な計算です。

例えば、文字式を使う必要のある、やや複雑な問題を見てみましょう。

> 以下を計算せよ（大阪教育大附池田校舎　平成 25 年度）
> $2013^2-3\times2012^2+2\times2013\times2012+3\times2012\times2011-3\times2011\times2013$
>
> 解）a=2013 b=2012 c=2011 とおく。
> 与式 $=a^2-3b^2+2ab+3bc-3ca$
> $=(a^2+2ab-3b^2)+(3bc-3ca)$
> $=(a+3b)(a-b)-3c(a-b)$
> $=(a-b)(a+3b-3c)$
> $=(a-b)\{a+3(b-c)\}$
> $=(2013-2012)\{2013+3\times(2012-2011)\}$
> $=2013+3=2016$

最初に因数分解ができそうな組を見つけてまとめた後、さらに (a−b) でまとめていくのがポイントです（別の方法もあります）。全体を見て気づくのは、数値の計算をしているのは最後の 2 行だけであり、しかもその計算は非常に単純であるということです。以上が簡単な計算で済んだのは、=(a−b)｛a＋3(b-c)｝の箇所まで文字式をまとめた上で、元の数値をあてはめたからです。しかし、完全にまとめ終わらないうちに元の数に戻してしまうと計算が複雑になる結果、ミスを誘発してしまいます。

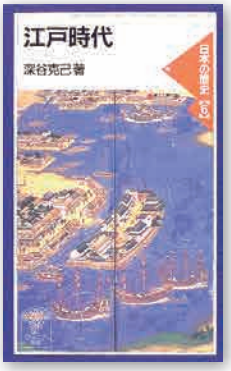
複雑な式のままで正確な答えを導く計算力は是非とも身につけてほしいのですが、その力は本当に必要な時以外は取っておきましょう。むしろ、文字式や方程式をできる限り簡単にした上で、数値の計算では「楽をする」ことがミスを防ぐ最大のコツです。

小学生『れきし』　　担当　吉川 弘晃

「れきし」クラスには新年度から新しい生徒さんが加わり、一段と賑やかになりました。自然の環境や動態から究極的に自由になることはできないものの、やはり歴史を作っていくのは、知や感情といった人間のエネルギーです。今この瞬間にも歴史に参加しているのだ、という当事者の意識をもって数百年前の私たちに思いを馳せてほしいと思います。

昨年は 1 年かけて、戦国・安土桃山時代に関する入門書を読みましたが、今年度は、江戸時代について学んでいきます。授業形式は変わらず、生徒さんそれぞれに本を音読してもらい、その箇所について講師が解説を加えた上で、双方で議論を行うというものです。今年度の授業で扱うのは、深谷克己『江戸時代』（岩波ジュニア新書、2000 年）です。

学期前半では、17 世紀前半、つまり豊臣政権の崩壊から江戸幕府の成立、幕藩体制の確立までを扱いました。この時期は、日本の政治や社会、文化上のシステムが変化を迎えます。簡単に言えば、中世以来進んできた武士の権力拡大が絶頂期を迎えたということです。中世社会では法律や制度などの面で、貴族（公家）・寺社・武士の三者がそれぞれの領域を形成していましたが、江戸幕府では武士がその他の



二者を統制するようになっていきます。勿論、これで貴族や寺社の役割がなくなったわけではありません。興味がある方は、この点について調べた上で、授業で報告してみてください。

では、日本国外に目を向けてみましょう。17 世紀前半の動乱は世界全体にとっても深刻でした。中国では明から清へと王朝交代が東アジアの社会全体に混乱を及ぼし、ヨーロッパでは長い間続くキリスト教内部の対立による凄惨な戦争が続いていました。ここで重要なのはヨーロッパとアジア、アフリカといった地域間が繋がりを深めていったという点です。15 世紀には明がアフリカに大船団を、16 世紀にはスペインやポルトガル、そしてオランダ（ネーデルラント）がアフリカ、インドを経由して東アジアに貿易船を派遣します。日本の戦国大名も積極的にヨーロッパ人との貿易を行い、17 世紀には東南アジアに日本人町が形成されていきます。

こうして完成した東アジアの海のネットワークとどう付き合うか。これが江戸幕府にとっての課題でした。「コミュニケーション」というのは、聞こえは良いですが、通商や文化交流といった富をもたらす一方で、奴隷貿易や宗教対立、病原菌といった負の要素を持ち込むことも忘れてはいけません。成立当初の江戸幕府が出した答えが「鎖国」（場所や方法を幕府が厳しく制限した上で国同士のやり取りを行うこと）でした。授業では「鎖国」によってキリシタンを弾圧した江戸幕府を非難も擁護もしません。鎖国を実施する側はなぜそうすることを選んだのか。そして鎖国を人々はどう受け入れていったのか。そうした問題を一つひとつ、様々な立場から自分の頭で考えていければと思います。

山の学校ゼミ 『社会』　担当　中島 啓勝

開始当初は三名、そしてこの二年ほどは四名の社会人受講者の方々と勉強してきたこの「社会」のクラスですが、年長のお二人がご多忙のためしばらくお休みされるということで、春からは残り二名の方と僕の、これまでで最もこじんまりとした体制で授業を進めております。今まで毎週顔を合わせて一緒に学んできた方々とお会いできないのはとても寂しいのですが、自分の親よりも年上の方々が精力的な活動の結果やむを得ずこの授業をお休みされるということで、本当に頭が下がる思いです。これからも皆さんとは定期的に交流を続けていくつもりです。

人数は変わりましたが、授業の内容は今までと変わっておりません。ニュースの解説と課題図書の講読を二つの軸に、世界の政治・経済・社会にまつわる問題について話し合いながら理解を深めることを目指しています。ニュースに関しては、主に「ニューズウィーク日本版」などの雑誌記事を抜粋して紹介しています。ただそれぞれの事件についての背景知識や追加情報をお伝えするだけではなく、複雑で入り組んだ諸現象の背後にどのような大きな思想的流れがあるのか、一見かけ離れているように見える複数の出来事に共通する問題は何なのかを、大局的に探ることを心がけております。そのためにも、東アジアや太平洋地域、ヨーロッパなどの普段テレビや新聞で目にしやすいトピックに偏らないように、南米や中東、アフリカ、そして中央アジアなどの地域に関するニュースもしつこく取り上げるようにしています。とは言え昨年から欧米諸国では重要な選挙が目白押しでしたので、こちらも見逃さないように丁寧に観察していく予定です。

課題図書の講読の方ですが、こちらは現在、岩崎育夫の『入門 東南アジア近現代史』(講談社現代新書) を読み進めています。「東南アジア」と一言で言っても、非常に多様な歴史・文化・国家体制を持ち、その全体像を把握するのが困難なこの地域ですが、土着国家が乱立してきた時代から世界の成長センターとして熱い注目を受けるようになった近年に至るまでの歴史的経緯や実態を、わかりやすく解説してくれる好著です。東南アジアについて学ぶことはそのまま、ヨーロッパの植民地帝国主義について学び、日本の戦争について学び、更には東西冷戦について学ぶことでもあります。いわば、東南アジア史とは近代史の縮図なのです。今後の世界情勢を占うためにも、この本を読んでしっかり勉強しようと思います。

『中学英語』（1～2年）、『中学英語』（3年）担当　吉川 弘晃

新年度を迎えた中学英語のクラスですが、反復と音読を重視する方針は変わっていません。改めて確認しておきますが、日本の中学校の英語カリキュラムは、全体の英語学習のうちで最低限の基礎を作っています。つまり、教科書に出てくる文法事項はおろか、単語や熟語、コラムに至るまで、覚えなくていいものは何一つありません。高校受験まで 1 年を切った中学 3 年の方はより一層の復習を心がけましょう。そして中学 2 年の方も復習を心がけると同時に「学校でまだやっていない」3 年の分野にも興味をもってみましょう。

学年に関係なく継続してほしいのは特に単語の学習です。授業では毎回、CD 付きの単語教材を用いて、単語テストを行っています。何度も繰り返すうちに生徒の皆さんの点数は上がり続けていますが、単語テスト以外の場で覚えたはずの単語のスペルを間違えるのを目にすることもよくあります。以下では発音と綴りの関係という点から単語学習のコツを説明します。

そもそも、他の西洋諸言語に比べて英語の単語暗記はそれほど簡単ではありません。なぜなら、英語の発音と綴りのルールは多岐に渡るにもかかわらず、日本の中学校でそうしたルール（フォニックス）を一定の時間をかけて教えるところは少ないからです。例えば、October を「オクトーバー」と発音する人が多いですが、正しくは、母音 o は口を大きく開いて欠伸を出す感じで「ア」と発音します。だから、「10 月」を October と正しく書けても、「アクトーバー」と発音できなければ、この単語を暗記したことにはなりません。同様に、box は「バックス」ですし、olive は「アリーヴ」のようになるのです。

授業でも改めてフォニックスを扱うつもりですが、生徒さん自身にとって最もためになるのは、付属の CD を自分の耳でよく聞いて、何度も自分の口で真似てみることです。この過程を抜かして単語教材を書き写しても効果はありませんし、黙読するのは言語道断です。① CD を聞く、② 発音を真似る、③ 紙に書くという 3 つの作業を必ずセットで行ってください。そうすれば自分の頭の中に自然と、母音 o は「ア」、u は「アッ」という感じだろう、という風に綴りと発音の関係のルールが身についてくるでしょう。

こうした学習方法はかなりの苦労と時間を要するのは言うまでもありません。しかし、楽をして覚えた単語や熟語はすぐに頭の穴から抜けていくでしょう。耳と口、手、時には身体全体を使って覚えれば、その穴は小さくなり、結果的に単語学習の近道となるのです。

『高校英語』A・B・C　『英語講読』A・C　担当 浅野 直樹

一口に英語と言っても内容は様々ですのでクラスごとに紹介します。

高校英語 A クラスでは国公立大学の長文読解問題を中心にしています。文法などの英語そのものの理解もさることながら、背景知識や論理的な理解、和訳する際の日本語の上手さなども求められます。実地で練習をしながらその都度コメントをしています。

高校英語 B クラスでは私立大学の公募推薦入試及び英検 2 級の対策をしています。前者では文法や語法の四択問題がたくさん出題されます。これはコミュニケーションのための英語というよりは独特な競技だと捉えたほうがよいです。ゲームのように繰り返しやればうまくなります。英検 2 級は語彙を増やすことに加えてライティングの型を作り上げることを目指しました。

高校英語 C クラスでは NHK のラジオ英会話を使っています。これは明らかにコミュニケーション重視の内容です。そこで話される英語は自然な表現で速いです。最初に一度聞いたときはほとんどわからなくても、文字を見て内容を理解してから聞くと聞き取れるのが不思議です。この作業を繰り返せばだんだんと初めて聞いたときにも聞き取れるようになります。

英語講読 A クラスでは自分が英語を使うという観点から、似たような意味の語の微妙な違いなどに着目しています。ブログのほうでいくつか紹介しているので、よろしければご覧ください。

英語講読 C クラスでは Eric Hoffer, *The Temper of Our Time*（エリックホッファー『現代という時代の気質』）を読んでいます。このクラスは英語を学ぶというよりも英語を使って新しい考え方などを知る機会になっています。

このように受講生の現状と希望に沿って英語に関する様々な活動をしています。

『イタリア語講読Ⅰ・Ⅱ』　担当　柱本 元彦

＜講読 I＞のほうは数年前に亡くなったアントニオ・タブッキの『夢の夢』を読んでいます。歴史上の著名人が（たいていは文学者・芸術家です）、＜いついつの夜こんな夢を見た＞ではじまる短い空想物語が並んでいます。文章もすっきりとして難解なものではなく、一篇の長さも数ページしかないので、ひととおり文法を学習した後に用いる講読テクストとしては最適でしょう。受講生からの質問に頼っていますが、文法事項などを確認しながらゆっくりと進めています。こんな風にこの一冊を読了すれば、後は何にでも突撃していけるように思います。＜講読 II＞は、イタリアで最も著名な音楽学者、マッシモ・ミラのモーツァルト論からオペラに関するものを取りあげ、前期に引きつづき＜コジ・ファン・トゥッテ論＞を読み、そして＜イドメネオ論＞を終えたところです。『イドメネオ』は滅多に上演されないマイナーなオペラですが（つまり見たことがないのですが）、「初期モーツァルトの最後の作品、あるいは成熟したモーツァルトの最初の作品、いずれにせよ十八世紀の＜退屈な＞オペラ・セリアのスタイルのなかでもっとも美しい作品」と書かれています。十八世紀のオペラ・セリアと言えば、スカルラッティやヘンデルを思い浮かべますが、ミラの言葉が本当ならばこれほど＜便利＞なことはない。・・・と思って早速ＤＶＤを購入しました・・・なのにまだ未開封なのは、忙しさにかこつけた怠慢以外の何ものでもありません。

『ドイツ語講読』　担当　吉川弘晃

移民、EU、ポピュリズムといった現代世界の難問をめぐり、ヨーロッパとその中心部であるドイツはますますその存在感を増してきました。混迷するグローバルな社会情勢を観察する上でドイツ語でのコミュニケーション能力はこれからも重要になっていくでしょう。

一方で明るい話もあります。最近、中高生を含む日本の若者のドイツ語への関心が高まっています。日本国内では、ドイツ語といえばかつてはゲーテやヴァグナーといった、ややお堅いハイカルチャーと結びつくイメージが根強かったのですが、2000 年代頃からアニメや漫画、ゲームといったサブカルチャーでドイツ語が積極的に用いられるようになります。その多くは個々の単語の響きの格好良さを利用したものではありますが、これを機にドイツ語世界に興味をもつ人々は事実、増えているのです。例えば、日独協会は 2 年前から「中二病で学ぶドイツ語」講座を日本各地で開催したところ、いずれも満員御礼でした（公式 HP による）。このようにして外国語を学ぶことの楽しさを多くの人に知ってほしいものです。

さて、今年度のドイツ語クラスは、初級文法を最初から学んでいく初級クラスと初級文法を一通り学んだ方が実際に文章を読んでいく講読クラスの 2 つが開講されています。

初級クラスでは、学期前半に最低限の文法事項の約半分を一通り学習しました。格変化や語尾変化のルールに加えて単語や熟語など必要な暗記事項が多いため、楽しさの前に厳しさが立ちはだかります。講師の解説は程々に済ませて、発音、文法、作文といった演習を繰り返し行うことで定着を図っています。後半は小噺や童話の講読を交えていくつもりです。前半に厳しさを詰め込むのは、楽しさの果実をいち早く掴むための促成栽培なのです。

講読クラスでは、ドイツ中近世史の教科書（Peter Blickle, *Unruhen in der ständischen Gesellschaft 1300-1800*）を冬学期から引き続き読んでいます。本書は、ドイツの都市や農民での反乱を単純に支配者と民衆の対立という構図で扱うのではなく、反乱の形態や参加者の行動や主張の多様性に注目して、ドイツ中近世の社会構造を見ていくというものです。冬学期までは論説文でよく使われるフレーズや難しい構文に注意して読んできました。ですが、今学期になると頻出する単語や熟語に慣れてきたこともあって読むスピードも上がってきたので、今学期からは文章同士の論理関係や段落同士の繋がりに注意して文章全体の構造を掴むことを目標にしたいと考えています。具体的には、（従属）接続詞や段落内の鍵となる文章に注意を払いながら読んでいくことになります。こうした読み方においては、文章内の格変化や枠構造の精確な把握がより一層重要になってくることを付け加えておきましょう。

『フランス語講読』A・B　　担当　渡辺 洋平

フランス語講読Aのクラスでは、前学期から引き続き、アンリ・ベルクソンの『物質と記憶』を読んでいます。現在は、一回の授業で 4 頁前後というペースで進んでおり、第一章の終盤に差し掛かってきました。

前号で『物質と記憶』第一章の大まかな枠組みを素描しましたが、第一章のテーマは「知覚」です。とはいえ、ここで考察されるのは日常的な知覚ではありません。私たちは、通常、過去の記憶を元にしながら知覚という行為を行っています。目の前にある物体が机であったり、本であったりということが分かるのは、机や本に関する過去の記憶があるからです。しかしベルクソンは、知覚の本性を見定めるために、一切の記憶を含まない知覚、すなわち「純粋知覚」というものを想定します。この純粋知覚には過去の記憶がまったく入りこんでいないために、個人の人格に結びつくような要素がありません。前号で、自分の身体に関係づけられたイメージ＝物質が「知覚」であると書きましたが、ここで言われる知覚＝イメージ＝物質とは、実はこの純粋知覚のことなのです。知覚とイメージと物質という三項がイコールによって結ばれるのは、あくまでもこの「純粋な」状態においてです。

ところで、純粋知覚には、過去の記憶の他にもうひとつ捨象されているものがあります。それが身体の厚みです。純粋知覚の理論において、私たちの知覚は、外界からの刺激に対して身体が反応し、影響を与えうる範囲として規定されますが、私たちの身体は拡がりのない数学的点のようなものではありません。そのため、知覚の対象も、そのあるものは身体の「外」にあり、またあるものは身体の「内」にあるということになります。例えば、視覚や聴覚の対象は身体の「外」に、痛みのような感覚や感情は、身体の「内」にあると言うことができます。このように、知覚と感情は、その対象となるイメージが身体の内にあるのか外にあるのかという明確な違いによって区別されることになるのです。身体とはまさに、各自の内と外の境界線であり、ベルクソンは痛みのような主観的な感覚も精神的で非物質的なものとみなすのではなく、あくまでも身体という拡がりを持った物質との関連で捉えているということになるでしょう。

フランス語講読Bのクラスも前学期から引き続きベルクソンの「形而上学入門」を読んでいます。前回読んだ箇所から引き続き、分析と直観、記号と事物、要素と部分といった対立する二項を挙げながら科学と形而上学とを区別しつつ、形而上学とその特権的な対象である「持続」の輪郭を少しずつ描き出していきます。

「形而上学入門」においてベルクソンは、形而上学とは真の経験論であると言います。それは、対象を捉えるために、すでにできあがっている既成の概念を用いるのではなく、その対象にしかあてはまらないような概念を生み出すような経験論です。もちろん概念は、それが概念である限りにおいて、ある程度の一般性を持たざるをえません。概念とはその定義からして一般性を持つものだからです。そのためベルクソンは、このような概念を、「いまだ概念であるとほとんど言うことができないような概念」だと言います。このような概念を生み出すことで、形而上学は対象をその固有性のままに捉えようとするのであり、その特権的な例が私たち自身の自我であり、ベルクソンが言う「持続」なのです。

このような形而上学のやり方は、人間の通常の思考の歩みとは方向性を逆にしています。人間の通常の思考は、例えば、「赤いペン」「きれいな海」「恐ろしい化け物」のように、すでにある概念を用いて対象を捉えようとします。考えることとは、通常、できあいの概念を用いて対象を認識することなのです。したがって、真の経験論としての形而上学は、人間の自然な思考を転倒させ、日常生活とは異なる方向へと思考を導いていかねばなりません。ここに他の科学とは異なる形而上学の特殊性があるのであり、形而上学は決して他の科学によって取って代わられることはないのです。ベルクソン自身の哲学とは、このような形而上学の実践だったと言うことができます。それはまさに「知性の通常のはたらきを転倒させる」ものなのです。

ベルクソンの考える形而上学とその特権的対象としての持続をより明確に捉えるためにも、さらに先へと読み進めていきたいと思います。

『ロシア語講読』　担当　山下 大吾

前号でお伝えしたように、前学期の途中から当クラスでは、プーシキンの短編小説集『ベールキン物語』の各編に取り組んでおります。現在はその冒頭に位置し、「駅長」と並んでこの小説集の中でも人気の高い「その一発」を読み終えたばかりのところです。この号がお手元に届くころには次編の「吹雪」を読み進める予定になっております。受講生は引き続き T さん、N さんのお二方。アクセントの位置も含め、細かい文法事項に目を配るテクストの精読を基本としておりますが、小説の内容や登場人物の性格をめぐっての意見の交換もまた重要で、毎週木曜の貴重な昼下がりの一時となっております。

「その一発」の主人公シルヴィオは、かつての決闘で受けた恥辱をそそごうと、決闘相手である伯爵に撃ち抜かれた帽子を胸に、撃ち損じることは決して許されない、自らに残された一撃の訓練にひたすら打ち込む人物です。射撃の多さから蜂の巣のようになった宿舎の壁、時折見せるらんらんと輝く両の目。執念深さの塊、復讐の鬼といったそれらの描写を読むと、性質の違いはともあれ、前回読んだ『スペードの女王』のゲルマンの姿と重なるところがあるかも知れません。

富や血統、名声はおろか、社交上のそつない身のこなしに至るまで、あらゆる点でシルヴィオを凌ぐ伯爵は、かつての決闘で、シルヴィオの狙いをつける銃口を前にして死に対する恐怖を些かも見せることなく、それどころか持参したサクランボを悠々と食べ、その種をシルヴィオに向けて吐き出す始末です（この伯爵の態度に、南ロシア流刑時のプーシキンその人の姿が反映されているというエピソードがあります）。そのためシルヴィオはこの決闘を一旦打ち切り、伯爵が死の恐怖を前に狼狽する姿だけを追い求め、この小説の語り手が所属する連隊の駐屯地で田舎暮らしを送っていましたが、ついに伯爵が近々若く美しい娘と結婚するという知らせを受け取ると、好機逸すべからずとその日の内に宿舎を引き上げ、復讐の秘密を語り手のみに打ち明けてモスクワに向かいます。

ある言葉を残して、伯爵の撃ち損じた弾痕に、殆ど狙いをつけずに寸分違わずその一発を撃ち込みつつ立ち去るシルヴィオの後ろ姿。この短編を読んだ者一人一人の脳裏に深く刻み込まれる名シーンです。

『ギリシャ語初級』（新クラス）　『ラテン語初級』
『ギリシャ語中級』A・B　『ラテン語中級』A・B
『ギリシャ語上級』A・B　『ラテン語上級』　担当　広川 直幸

ギリシャ語、ラテン語の授業は、初級、中級、上級の三つのレベルに分けている。授業レベルの大体の目安は、初級は初心者向けの入門、中級は散文あるいは平易な韻文の講読、上級は韻文あるいは難解な散文の講読である。

今学期新規開講したギリシャ語初級では、Peckett & Munday, *Thrasymachus* を教科書に、文法の解説よりは読解と作文に重点を置いた授業を行っている。ラテン語初級は Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana*（教科書）、*Exercitia Latina*（問題集）、*Colloquia personarum*（副読本）を用いて初歩を学んできた。今学期で問題集と副読本も含めてすべてを学び終えるので、来学期からは中級として講読を始める。何を読むかはまだ決まっていないが、プリーニウスの『博物誌』第 7 巻にするかもしれない。中級以上はというと、ギリシャ語中級 A はルキアノスの『本当の話』を、ギリシャ語中級 B はプラトーンの『ソークラテースの弁明』を読んでいる。ラテン語中級 A はサッルスティウスの『カティリーナの陰謀』を読み終えたので、オウィディウスの *Ars amatoria* を読んでいたラテン語中級 B と合併してラテン語中級（月曜日）になった。ラテン語中級ではキケローの『カティリーナ弾劾演説』を読んでいるが、ちょうど読み始める時に長らく月曜日のラテン語に通っていた受講生が急に通えなくなってしまったのが残念である。ギリシャ語上級 A はアイスキュロス

の『縛られたプロメーテウス』を読み終え、箸休め的に『アイスキュロス伝』を読んでからアイスキュロスの『ペルシャ人』を読み始めた。ギリシャ語上級Bはロンギノスの『崇高について』を読んでいる。ラテン語上級は引き続きCatullusを講読している。それぞれの授業の進度については、学期が終わった段階で山の学校のホームページに掲載するので、そちらで確認してもらいたい。

来学期は木曜日（20:10 ～ 21:30）にラテン語初級を新規開講する予定である。初級の授業は一旦開講するとしばらくは新規で開講することがないので、興味のある方はお見逃しなく。教科書は Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* を用いる。また、火曜日のラテン語初級（18:40 ～ 20:00）は来学期から中級になって原典講読を始めるので、講読の授業を探している人には参加しやすいタイミングだと思う。興味があれば遠慮なく問い合わせてもらいたい。

『新約ギリシャ語初級』　担当　堀川 宏

このクラスでは『マタイによる福音書』を、Nestle-Aland 版で毎回 1 ページほどのペースで読んでいます。このところ休講が続き、なかなか進度を保てなかったのですが、ようやく第 12 章の終わりに差しかかりました（6 月初頭現在）。

先日は、パリサイ派からの非難を受けて、イエスが自身の主張を人々に語る場面を読みました。そこでイエスは「神の国はすでに到来している」と主張し、自身の行動は「神の霊」の力のもとになされていることだから、自身に従わない者は神に敵対することになると、人々に語りかけます。比喩的な語りが続き、必ずしも読みやすい箇所ではないのですが、強い口調で人々に選択を迫るイエスの語りが、同時に、テクストを読む我々にも選択を迫っているようにも感じられました―イエスの言葉がこのように、物語内での直接的な応答関係を越えて、テクストの読み手にまで迫ってくるという点に、『聖書』を読む醍醐味があるように思われます。

引き続き無理のないペースで、基本的な文法なども確認しながら進んでゆくつもりです。関心のある方は、ぜひ一度教室を覗いてみてください。

『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』　担当　山下 大吾

今学期も講読クラスが 4 クラス開講されております。その内 A、C、D クラスが散文のキケロー、B クラスが韻文のホラーティウスという内容です。なおキケローとその通信相手の書簡を読み進めている A クラスは、前号でお伝えした前 45 年のセルウィウス宛キケロー書簡を読了した段階で一旦中断という形になっております。初級文法クラスも含め、いずれのクラスでも新規の受講生を募集中です。講読クラスは文法を一通り終えた方であれば受講可能です。どうぞお気軽にお問い合わせください。

C クラスでは Cu さんと共に『老年について』を引き続き読み進めておりますが、76 節まで進みましたので、全 85 節からなる同作品の読了に目処がつく段階となりました。振り返れば一昨年の冬学期がスタートで、一語一語丁寧に文法的説明を行い、註釈にも隅々まで目を通されるという Cu さんのテクストに対する当初の姿勢は一貫してそのまま維持されています。難易の区別を明確に判断する能力も備えられており、指南役たる当方としても毎週大変有り難く感じております。

Ci さんと共に『トゥスクルム荘対談集』に取り組んでいる D クラスでは、第 1 巻の三分の一に相当する 39 節まで進みました。その 39 節には、Errare malo cum Platone「私はむしろプラトーンと共に間違うことを望む」という一節があります。プラトーンがキリストに置き換えられた内容の言葉を自身の信仰告白としたのがドストエフスキイです。哲学、宗教とそれぞれの立場あるいは視座の違いはあれども、我々人間のある対象に向かう止むに止まれぬ熱意が、その不条理な側

面と共に直截かつ明確に伝わる名言であることに変わりはありません。

B クラスでは引き続き Ca さんと『諷刺詩』を講読中、現在は全 2 巻 18 編中最長となる 2 巻の第 3 編に取り組んでおります。今学期も、2 巻第 2 編の最終行にあたる Fortiaque adversis opponite pectora rebus「逆境に対して力強く胸を張れ」という、golden line と称される abCAB という語の配置の詩行を始めとして、印象深い名句を味わう機会に恵まれました。ただし B クラスとしてそれにも増して印象深い出来事は、amaris という綴りの語を、正解に辿り着く前に、恐らくは何度も繰り返した文法表の暗記作業の結果、Ca さんともども動詞 amo の一形態、さらには amaveris の省略形だと瞬時に判断してしまったことでありましょうか。お互い破顔一笑の土曜の昼下がりとなりました。

新クラス

『西洋古典を読む』

担当　福西 亮馬

毎日毎日を最後の一日と決める（人、このような人は明日を望むこともないし恐れることもない）。
——『人生の短さについて』7 章 9 節（セネカ、茂手木元蔵訳、岩波文庫）

この講読クラスでは、『人生の短さについて』（セネカ、茂手木元蔵訳、岩波文庫）を 1 章ずつ、2 ページずつのペースで読んでいます。高校生の A さんとマンツーマンです。日本語訳のテキストを読んで、生徒からそのつど質問してもらい、巻末の訳註や他の複数の翻訳、原文ともしばしば突き合わせながら内容を確認しています。たとえば上のフレーズの直訳は、すべての（omnes）一日を（dies）あたかも（tanquam）最後のものとして（ultimum）配置する（ordinat）、となります。ordinat は ordo（順序・秩序・オーダー）という単語からなる動詞で、（順番通りに）整理する、（全体とのバランスを）調整する、アレンジするという意味です。

セネカは、「人生の短さ」についての読者のイメージを冒頭から裏切ります。「人生は十分に長く、その全体が有効に費やされるならば、最も偉大なことをも完成できるほど豊富に与えられている」（茂手木訳）と。その処方箋が**「毎日毎日を最後の一日と決める」**ことです。セネカは、人生とは「現在」として活用された時間の総和のことであり、「未来」の時間のために現在のそれを無駄遣いすること、そのことが人生を短くするのだと断じます。ちょうどエンデ『モモ』に出てくる道路掃除夫ベッポのようです。

「いちどに道路ぜんぶのことを考えてはいかん、わかるかな？ つぎの一歩のことだけ、つぎのひと呼吸（いき）のことだけ、つぎのひとはきのことだけを考えるんだ。（…中略）ひょっと気がついたときには、一歩一歩すすんできた道路がぜんぶ終わっとる。」
——『モモ』4 章（エンデ、大島かおり訳、岩波書店）

セネカはまた『倫理書簡集』71 章 3 節で、「どの港を目指すか知らない者には、どんな風も順風にはならない」(『セネカ哲学全集 5』高橋宏幸訳、岩波書店）とも書いています。この港とは文脈では「人生全体の目標」のことを指します。A さんはそこではたと矛盾を覚えました。セネカは同じことを言っているのか、それとも違うことを言っているのかと。つまりこういうわけです。**「一日という視野で人生全体の設計が可能なのか」**と。確かに一日では目先のことに刹那的になる恐れがあります。セネカはあれだけ快楽主義に反対しておきながら、まさにそのことで快楽主義に陥るようなことを主張しているのでしょうか。はてさてこの違和感、どうしたものでしょうか？ 実際、この疑問こそがクラスの現時点での到達地点であり、今後何度も戻るベースキャンプになるだろうと思います。

実はセネカは「全体に部分を一致させる」という視点を持っています。このクラスで未知なのはその「位置づけ」の視点です。そしてセネカは「人生全体の目標」をストア派の「最高善」に置いています。それなので最初の問いは、**「その日を最後と思うことで、人生全体の目標という視野は手に入るのか」**かつ**「人生全体という視野で一日の設計が可能か」**と問い直す必要があるのでしょう。これは私の解釈でしかないのですが、仮にめいめいが人生というジグソーパズルで完成の絵柄を思い描いている様子をイメージしてみます。そこにもしセネカがいたらこう言うのではないでしょうか。「一日という一個のピースを手に持ったら、その都度、確定させていくことだ。隣人であれお互いのピースがうっかり混ざらないように気をつけよ。なぜならその箱の絵柄は一人ずつのものだから」と。

そこで問題があります。最高善とは何なのかということです。果たしてそれが人生の途中から分かるようなものなのでしょうか。私には分かりません。だから港のない船同様、私もまた矛盾の海の中に放り出された状態です。そして矛盾こそが人生そのもののようにさえ思われ、現実問題としてはたと立ち止まってしまいます。だから古典への再接近が促されるのかもしれません。

講読の内容
1） 要約（予習）の公表
2） テキスト（日本語訳）の音読
3） 線引き、抜き書き
4） 原文の確認
5） 他の翻訳、註の参照
6） 時代背景、引用の出典調べ
7） テキストについての意見交換
8） その他の意見交換

さて、クラスでは左の表のようなことをしています。80 分では 1 章ずつ進んでも足りないぐらいです。もし仮に 2 章分進めたとしても、そうしないことには十分なメリットがあると考えています。他の本が読めなくなることは確かにデメリットですが、あくまで一冊に限って言えば、それと関わった時間を「長く」できます。実際、記憶への定着率が上がりますし、印象的なフレーズ、テキストの部分部分を想起する回数が増えます。するとだんだんテキスト全体が生の新鮮なものに感じられてきます。また A さんは打てば響くように質問を返してくれるので、話題が次々と膨らみます。セネカの死に方、帝政ローマという歴史的背景、ストア派とエピクーロス派の基本的な考え方、キケローの『国家について』、またプラトーンやアリストテレース、デカルトの『方法序説』、哲学と倫理学との差異、などなど。

このあとも引き続き、「今直ちに生きなければならぬ」という言葉や、「幸うすき人間どもにとって、まさに生涯の最良の日は、真っ先に逃げていく」というウェルギリウスからの引用（ともに茂手木訳、9 章）が出てきます。セネカは一体どのような意図をもって、こうした同じとも取れる内容を繰り返し書いているのでしょうか。一緒にこのなかばミステリーを味わってみませんか。中学生・高校生の奮ってのご参加をお待ちしています。

『しぜん』A・B1・C1・C2　　担当　梁川健哲

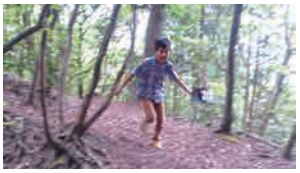
Ａクラスでは、険しい道を辿って一つ隣の山まで行き、障害物競走や綱引きなど、自分たちでルールを話し合って決めた「運動会」をしたり、木の枝にロープをひっかけてブランコをしたりと、この４月、５月は体を思い切り動かす活動が多かったです。クサイチゴを夢中で頬張ったあとは、ひたすら鬼ごっこをして汗をかく、そんな日もありました。巡る季節の中に散りばめられるそうしたイベントの幾つかは、定番になりつつあります。「いつもの『あれ』しよう！」といったように。

ある時、ふと聞き慣れない鳥のさえずりを耳にして、みんなで声のする方に忍び寄りました。キツツキらしき鳥が、樹の幹を垂直に移動したり、嘴を空に向けて鳴いたりしています。つい先程まで駆け回っていた私たちは、一転して静かに、鳥の姿を少しでも見ようと集中していました。

このように、静的であれ、動的であれ、みんなにとってはどちらも何かに夢中になっている大事な時間なのだと改めて実感します。

また、このクラスではしぜん日記の発表も盛んですので、興味の対象が様々に異なる仲間同士が発見を共有できる機会として、引き続き活かして行きたいです。低学年が一所懸命に声を出して日記を読み上げるのを、上級生が静かに見守ってくれています。そのことを嬉しく、微笑ましく思います。内容だけを見るなら、既に知っていることであったり、上級生にとっては物足りなさを感じたりすることもあるでしょう。しかし、そこにある発見の喜びや新鮮さを、「かつての自分」のそれと重ねあわせて耳を傾け、或いは言葉をかけてあげて欲しいと願っています。

「秘密基地の修繕もしたいなぁ」「梅ジュースも仕込んでおかないとね」「虫見つけたいなぁ」そんな言葉が最近では飛び交っています。この一年、どのようなストーリーが展開していくのでしょうか。次のページはいつもほぼ真っ白ですが、何かワクワクすることが、必ず待っているはずです。



Ｂクラスでは、「しぜんの『生きた』箱庭づくり」の取り組みが、みんなには響いたようで、今のところ活動の軸を成しています。「雑草」と一括りにされる諸々の草、苔や木の芽など、足元の小さな自然に目を向け、それらを用いて小さな庭を作る試みです。

材料集めに出かけた初回、採取用に渡したトレーの上に、早くもそのまま綺麗な庭を作ってしまった人もいました。ただし、一見して綺麗に並べただけでは、その場限りの庭にしかならず、「生きた」庭にはならないことが、回を重ねる毎に分かってきます。水分が乾きやすく、すぐに元気が無くなってしまうのです。一方、トレーの中にたっぷり水を含ませておいたものや、ガラスを被せてテラリウム状にしたものは、次のクラスまでよく保っています。水分をいかに保つかが鍵で、そのためにはどうすればよいか、みんなと考えながら少しずつ作り進めてきました。

材料というよりは「庭の住人」を探すつもりで、みんなには、苔や草花を少しだけ「分けてもらう」という気持ち、道などの「すみっこ」に注目すること、この２つを伝えています。「この小さいお花、何だろう」といって連れてきた草が、次のクラスで赤々と実をつけていたり、何も植えていない場所に何かの芽が生えてきたり、そうした意外な発見も楽しみの一つです。石や砂も集めようと出かけた沢で「ダムづくり」に熱

中するなど、時に「有意義な脱線」があるのは勿論のこと。
　この小さな装置が、「自然」と向き合う態度に何かしらの変化をもたらしてくれるのではないかという期待や願いが根底にはあるのですが、土を触り始めて無心になっているみんなの様子を見ていると、こちらの理屈は脇に置いたままでいいのかもしれない、という気持ちにさせられます。

　この 4 月から新しくクラスに入った C1 のみんなは、発見したことを絵や文で書き表したり、また、意見を交わしたりすることに積極的で、そこに喜びを感じてくれているようです。
　例えば An ちゃんは、「種」についての発見を毎回伝えてくれるので、「種」のあれこれについて調べ、深めていくだけでも面白いと思います。ある日、「みんなの分を持ってきたよ」と言って、机の上に並べたカラスノエンドウのさやの一つが、少し触っただけで、パカっと割れて種が飛び出してしまいました。「あれ？さっきは真っ直ぐだったのに、すごくねじれてる」と、しばらくしてからさやの形の変化に気が付きました。こうした一つの出来事だけをとってみても、すごく不思議で面白いことです。

　このように、序盤は静かに自然と向き合うこの雰囲気を大事にしながら活動を進めていき、発見したことについて、さらに調べたり、考えを深めたりすることができればと考えています。一方ではものづくりが好きな生徒さん達なので、先に紹介した「箱庭」の取り組みがその延長線上に来てもピタッとはまるような気がしており、今から楽しみです。

　C2 クラスでは、森の奥の「秘密基地」と、沢とが活動の中心になっており、何処へどの順で向かうか、その日のルートをみんなで話し合ってから出発します。
　基地と沢とを繋ぐ斜面のルートは、木々を縫うようにして二つをほぼ一直線に繋いでいます。つづら折りの山道を歩いて通ればズボンを泥んこにする必要も無いのですが、もう久しくみんながそちらを選んだ記憶がありません。
　最初は腰が引けていた何人かも、幾度も滑り降りる・よじ登るを繰り返してきた今、一歩一歩踏みしめながら、逞しく行き来しています。「随分頼もしくなったなぁ」と、そんな後ろ姿を見守りながら最後尾を上っていったあるとき、「先生、掴まって！」という声とともに、先に基地に辿り着いたみんながロープをこちらに垂らし、軽々と私を引き上げてくれたこともありました。

最近では、ひたすら沢の上流へ向かう日がありました。ただそれだけのことなのですが、定番の沢蟹をはじめ、骨や足跡などの獣の痕跡、モリアオガエルなど、幾つもの出会いや発見に足を止めては感嘆し、横たわる倒木を潜ったり乗り越えたりしながら展開する未だ見ぬ風景に吸い込まれるように、みんなはぐんぐん進むのでした。

まさしく「冒険」の二文字が似合う仲間たち。基本的にはみんなが目まぐるしく働かせている感覚を信頼し、体得されるところを尊んでいます。私としては何事についても要所で口癖のように「心して、心して…」と伝えながら、みんなが一層絆を深め、自信を強めていけるよう、これからも見守り応援していきたいです。

『しぜん』B2　　担当　森山 純

昨年度のクラスを引き継ぎ、メンバー 4 人は 2 年生になりました。昨年度は水筒など私物を持ってあげることも多々ありましたが、今年度から頼まれても断り、「2 年生になったから自分のものは自分で管理すること」と言うようにしました。すると、次の週から全く頼まれなくなりました。本人たちも学年が上がり、心身共に成長した自覚を持っているようです。

昨年の今頃は毎回生き物探しをしていましたが、昨年度の冬には基地作りを行ったこともあり選択肢が広がり、日によって希望を聞いて活動内容を決めています。私の幼少期は自然の中で遊ぶことはほとんどなかったため、生き物探し以外の活動はすべて私も初体験です。自分の経験がない分、小学生は自然の中で何をすると楽しく、好奇心が刺激されるのかがわかりません。しかし、新しい活動を取り入れたほうがクラスのメンバーも楽しいと思うので、私自身も挑戦しながら探り探りやっていこうと思っています。そのひとつとして、H ちゃんが持ってきてくれたロープを使ってブランコを作りました。試作品をつくり、全員に乗ってもらい、意見を聞いて一緒に改良しています。自然のジャングルジムと呼ばれている木々も含めて、良い遊び場にしていければと思っています（写真 1,2）。4 月に生き物を探しに行ったときはあまり見つかりませんでしたが（写真 3）、5 月に入り急激に気温が上がったので、私の本領も発揮できそうです。私自身も先生として成長しながら、様々な活動を一緒に楽しもうと思います。

1.

2.

3.

すが、意味を確かめながらゆっくり読めればよいという場合、無理に暗記をする必要はありません。それで挫折しては元も子もないからです。

幸い私のクラスの受講生は、趣味でラテン語を学ぼうと考える人たちばかりです。一番大事なことは「楽しく続けること」であり、一番避けたいことは「挫折すること」です。もちろん「楽しく」学ぶにはそれなりの努力が必要で、「ラテン語は調べればわかる」と確信できるだけの経験を重ねることが不可欠です。教室でラテン語を学ぶ人は、挫折さえしなければこの経験を得ることができますし、一方、そのチャンスの得られない多くの場合、解答と解説付きの教科書や練習問題[3]を使えば、この経験を自宅に居ながらにして積むことが可能です。その結果として、文法の教科書のどこにどのようなことが書いてあるか、およその目途がつくようになれば、ひとまず目的達成です。

こうして文法という地図の使い方がわかれば、いよいよ旅に出ること、すなわち、原典講読に挑戦することができます。ただし、教科書と辞書を用意すれば、すぐに原文の意味がとれるかといえば、話はそう甘くはありません。やはり、初学者には初学者なりのツールが必要です。そこで、私は考えました。原文に出てくるすべての単語の文法的解説と語彙の説明をほどこした教材があればどうだろう、と。そうしてできたのが今回の本というわけです。単語集も逐語訳も、学習に必要なものは全部用意しました。あとは、解説を読みながら、教科書と辞書を使って知識の確認作業を繰り返すだけです。ヒントを見なくても、原文の意味やニュアンスが頭に浮かぶようになれば、その結果、文法も語彙も、覚えるべきものは自然に覚えるでしょう。

ラテン語は死語なのになぜ学ぶのか、という問いを受けることがよくあります。たしかに「会話する」相手がいない言語ではあります。しかし、ヨーロッパ文明の魂というべきものがラテン語で書かれた文献に宿っています。原典講読を通じ、キケローをはじめとする古典作家の魂と「対話する」ことは可能であり、私はそのためにもラテン語を学ぶ意義はあると考えています。

私がラテン語の普及に注力するのには、もう一つ別の理由があります。グローバル時代と言われて久しいのですが、欧米の漢文と呼べるラテン語を学べる場所はいまだに限られていて、初学者が手に取って自習できる学習書はなきに等しい状況です。研究書、論文、翻訳といった専門家の不断の努力の結晶を社会が十二分に生かすためにも、基本を学ぶ層が広く厚く存在してほしいと願います。スポーツしかり、音楽しかり。すそ野を広げることの大事さは、ジャンルを問いません。

とは言え、ラテン語の学習環境について言えば、現状のままで何も痛痒を感じないという人がほとんどだと思います。この事実が示唆する西洋古典学全般への無理解と無関心は、昨今の人文学軽視の風潮とあいまって、学問と教育の危機を招く遠因につながっていると思われます。民主主義にせよ、学問や教育のシステムにせよ、そのルーツがギリシア・ローマの古典精神に遡ることは自明ですが、我が国は「和魂洋才」のスローガンを墨守するあまり、「洋魂」の根っこを問うことを知りません。その結果、耳当たりのよい「改革」のスローガンが繰り返され、研究と教育の現場は無数の介入によってかき乱されているのが現状です。

「和魂でじゅうぶん」。社会にそうした偏見が満ちるとき、世の中は閉塞感に包まれます。そこに風穴を開け、自由の空気が通うよう窓を開けたいと願うとき、また、学問について、教育について、真善美について考えるとき、人類の英知の宝庫たる西洋古典に無関心を決め込むわけにはいかないでしょう。その考えの賛同者を募るべく、私は「ラテン語講習会」を開いています。日頃幼児教育に取り組む者として、真理と自由が尊重される社会が子どもたちの未来を明るく照らすことを心から願い、その未来の鍵を握るのがラテン語であると信じるからです。そしてその先に、音楽のクラシックがそうであるように、西洋古典——英語ではクラシックス——への親しみと敬愛が日本社会に根付くことを願います。（山下太郎）

---

[3] 拙著『しっかり学ぶ初級ラテン語』（ベレ出版、2013）、『しっかり身につくラテン語トレーニングブック』（ベレ出版、2015）等。

山びこ通信
2017 春 学期号
平成29年6月27日発行・通巻第54号
（平成15年7月第1号発行）
発行元　学校法人北白川学園　北白川幼稚園・山の学校　京都市左京区北白川山ノ元町41
FREE PAPER